

# essay

走りつづけて

ふと立ち止まり

農業 時田 則 雄

焼酎のその透明を飲みしゆゑ

明日がうれしく思へてくるぞ

人生八十年の時代に入った。私はいま四十五歳。従って身体的に特別なことがないかぎり私の人生八十年ということになる。つまり、三十幾年かの後には白骨と化しているということだ。そんなことを考えると、これからの人生がとても大切に思われてくるのだ。

盛りあがり春陽に眩し反転土

つちにも裏のあるを知りたり

二十年二十度鋤く土の香り

その新鮮にこころ躍れり

トレーラーに千個の南瓜と妻を積み  
霧に濡れつつ野をもどりきぬ  
離農せしおまえの家をくべながら  
冬越す窓に花咲かせおり

敗北はあるひは罪がプラキストン・

ラインこえきし祖父を越すべし



時田則雄・ときたのりお  
昭和21年帯広生まれ。帯広畜産大学別科を経て農場経営。帯広市森林組合理事。角川短歌賞、現代歌人協会賞、北海道新聞短歌賞など受賞。歌集は「北方論」、「緑野疾走」、「凍土漂白」、「十勝劇場」、「講談社学術文庫・現代の短歌」(共著)など。現在、日本文芸家協会・現代歌人協会会員。「家の光」文芸選者、道立農大講師など。

父の後を継いで農に就いたのは昭和四十二年。離農の嵐のまっただなかであった。以来今日まで、離農跡地を取得して経営規模を拡大し、大型機械を喰らせながら走りつづけてきた。祖父の代の八十町歩を越すことがひとつの目標でもあった。だが、いま、人生のまんなかに来て、その目標に向かうことは中止した。これまでの生き方を否定するというのではないが、農村生活者には農村生活ならではの生き方があるように思われてきたからだ。

### 山の裏みてきたりけり山の裏

雪しんしんと降りあたりけり

太古より現つを嘆くは常にして

ひとは眩しく空をみあぐる

私が子供だった頃の農村には鬱蒼とした森や、魚がたくさん棲む川があった。家敷には豚や鶏や山羊、羊が家族の一員のようにして暮らしていた。ランプの灯りの下には家族同士の温りのある会話がかった。盆や祭を通して部落の仲間たちは連体を深めた。運動会は生徒よりも父兄の方が盛りあがるほどであった。物質的にはいまよりも貧しかったけれども、精神生活の面では豊かであったように思うのだ。

昭和三十六年に施行された農業基本法には「農業と他産業との経済的地位の均衡」と記されている。三十年を経た今日、これは果して達成されたのであるか。経済面ではいまだに出稼ぎや兼業農民が存在している。また、生活面では電化製品や自動車普及し、都会生活者と変わらないほどになった。だが、肝心の精神生活はどうなったのだろう。例えだ余暇の過ごし方をみた場合、金銭に頼った受け身のな過ごし方が多いように思うのだ。

最近の日本列島はリゾート乱造列島である。しかし、自然を破壊して自然よりも優れた保養地を造るなどというのは無茶である。極端ないい方かもしれないが、ほんもののリゾートとは農山村そのものである。農山村は単にそこに暮らす者だけの場ではなく、食糧や木材のみを生産する場ではなかつた。農山村は国土の保全など、その果たす役割は極めて大きい。農山村の緑の減少化をこれ以上進めてはならない。走りつづけて、ふと立ち止まり、このようなことを思うこの頃である。

まだ吠いているぞ連翹いますこし

狂ってゐたい人生である